

スポーツ人文・応用社会科学系

氏名 まえ 前 だ 田 ひろ 博 こ 子 准教授



主な研究テーマ

- 地域スポーツクラブにおけるボランティア・マネジメントの研究
- スポーツとジェンダー，サッカーの社会学

平成23年度の研究内容とその成果

昨年度から引き続き取り組んでいる研究テーマは、非営利組織におけるボランティア・マネジメントです。専門のスポーツ社会学の研究視点で研究を進めていますが、組織としては非営利の地域スポーツクラブを、ボランティアとしては学生を中心にした若者を研究対象として取り上げています。具体的には若者がスポーツクラブでボランティア指導を行う場合、どのようなマネジメントが良いのかを明らかにすることです。組織における若者のマネジメントと言うと管理方法と捉えられるかもしれませんが、ここで目指しているのは一般的な管理という概念ではなく、ボランティアをする若者が気持ち良く活動でき、自らの持つ力を精一杯発揮することができ、さらに成長していくための受け入れ体制を整えるために役立つ研究です。

世界的な傾向として政府（国と地方自治体）が行う仕事を縮小する、小さな政府への志向があります。政府が縮小すると、住民の生活を支援する「公」の仕事の範囲も縮小されていきます。それを代行するのは

民間企業と考えられていましたが、現在は「新しい公共」概念で示されるように、住民自身であり、住民が組織する非営利組織（NPO）なのです。そして、これからの社会に不可欠なNPOがあらゆる地域のあらゆる分野に行き渡るには、多くの住民が参加していくことが期待されるのです。ボランティアは災害時などの非常時だけ求められる人材ではないのです。その中には専門的能力に不足する若い人たちも含まれています。この若い世代の人々がこれらの組織に関わりその組織に中核に育つと同時に、より下の世代を育てていくシステムづくりを早急に進めていく必要があるのです。

人のマネジメント方法についてはいろいろな理論がありますが、リーダーシップ理論もそのひとつです。リーダーシップ理論にもさまざまなものがありますが、現在取り組んでいる研究ではSL理論を使用しています。リーダーシップ理論の多くが共通するのは、リーダーの行動を2つの軸－フォロワーに対して指示を与える行動や言動とフォロワーを支援する行動や言動－によって説明しているところです。そして、

効果的なリーダーシップ行動とは、この両軸が高いレベルにあるとしています。しかし、そこに影響を与える様々な要因の存在が明らかにされており、SL理論は効果を左右する要因として「フォロワーの状態」に着目しています。ボランティアの場は活動を始める時に、企業の採用のような選別が行われません。個人の力量に差があり、かつ成長の著しい若者を対象にする場合、フォロワーの相違を視野に入れたSL理論を適用したマネジメントの研究を進めることに意義があると考えました。

平成23年度は、ボランティア・スポーツ指導を行っている大学生を対象にインタビュー調査を行ったデータを使用し、SL理論をもとに分析して学会発表を行なっています。ここで論じたのは、学生の能力や意欲の状態（レディネス）によって、適切なリーダーシップ行動は異なるのかということで、結果として変化することが実証されました。今後、レディネスをどのように測り、リーダーシップ行動をどのように変化させていくべきなのかをより詳細に示していくことが課題です。

また、前年度まで日本フットボール学会の理事として準備してきた国際学会、「World Congress of Science and Football 2011」を名古屋大学で開催しました。そこでは、高校生のサッカーのプレーにおけるフェアプレイ意識に関する研究発表を行っています。

この他、日本スポーツ社会学会、日本スポーツとジェンダー学会、九州レジャーレ

クリエーション学会の理事として、また九州体育・スポーツ学会の事務局として、それぞれの学会の運営を行い、研究発表の場を発展させることに尽力しています。

これからの研究の展望

今後は、昨年度末から始めているインタビュー形式による質的データの収集を進めていきます。そして、地域スポーツクラブで活動する若者は、どのような特徴を持った者がどのようなリーダーシップ行動を望むのかを明らかにしていこうと考えています。特に、活動を始めてからの経緯について注目し、個人の変化と成長を反映したマネジメントモデルを作成していく計画です。